編集を終えるにあたり

今から３年前2009年（平成21年）に迎えた千葉大学医学部創立135周年の記念誌をお届け致します。刊行が遅れ申し訳ございませんでしたが，多数の皆様方の貴重なご寄稿により，大変充実した冊子になったものと信じます。

1974年（昭和49年）に創立100周年を祝ったあと，千葉大学医学部では特に大きな周年事業は行われず，130周年にあたる2004年（平成16年）前後人々の話題に上ったものの，この年が国立大学法人化の年にあたり慌ただしさも手伝ったせいか，実現に至らなかった。ゐのはな同窓会ではかねてより老朽化した同窓会館の建替えが検討されていたが，その後，医学部側からは新たな講堂の必要性も指摘された。これらを受けて，2005年（平成17年）秋には，当時の徳久剛史医学部長・医学研究院長，中谷晴昭評議員，堀江寛事務長，鈴木定雄専門官を中心に，135周年記念事業が立案され，2006年（平成18年）春には記念誌の刊行も発案された。こうした事業案をもとに同窓会側と協議，渡辺武会長を中心に検討が重ねられた。2007年（平成19年）６月の教授会ならびに同窓会総会の承認を経て「新ゐのはな同窓会館設立（千葉大学医学部創立135周年記念）事業会」が正式に発足した。135という数字は，中途半端の様でもあるが，奇数が昇順に並び，リズムと勢いがある感じもする。また，記念講堂を建立して盛大に祝った85周年から50年の節目にもあたる。

伊藤晴夫事業会長・同窓会長，寺澤捷年事業会財務委員長を初めとし同窓会を中心とする献身的な募金活動により，翌2008年（平成20年）には事業遂行の見通しも立ち，７月に第１回記念誌出版委員会が開催された。翌2009年（平成21年）２月に延べ250名近い方々に寄稿を依頼した。なお，同月に第１回建物・設備等整備委員会（田邊政裕委員長）も開催され，講堂に代わり多目的ホールを備えた新同窓会館設立へ向けての活動も開始された。

寄稿依頼後，１，２週間という迅速さで原稿をお届け頂いた方も居られたが，一般に原稿の集まりには時間がかかった。その一因として，「百周年記念誌」刊行以来35年の空白があり，執筆者の方々も資料収集等にご苦労されたであろうことが考えられる。できれば，この様な記念誌，周年史は20年に一度は刊行されるべきであろう。「百周年記念誌」のあとがきで，萩原彌四郎先生は10年毎の刊行を勧めておられる。以来35年の間に，当然残されるべき記憶で機会を失したものも多いと思う。例えば，医学部長，学長，同窓会長を歴任された井出源四郎先生は寄稿依頼を申し上げる直前に他界された。もし間に合えば，さぞや興味深い達文をお寄せ頂いたであろうと悔やまれる。次回はおそらく150周年に刊行されるであろうが，その後のことも早めに考えておいた方が良い気がする。

編集部の企画としては年表と「キャンパスの変遷」を編んだ。どちらも，編集部の高野晴美さんの助力によるところが大きい。年表は「百周年記念誌」と毎年刊行される「千葉大学医学部概要」から転載させて頂いた部分に，関連施設・団体，建造物等に関する事項を加筆し，今日の「千葉医学」のハードとソフトの生い立ちの理解に資することを心がけた。また，背景となる時代の雰囲気が伝わる様，県内，

国内外の印象深い出来事を多く記した。一方，「キャンパスの変遷」では，かつて千葉の町や亥鼻の何処にどの様な建造物が作られかつ移ろっていったかが視覚的に把握できる様に努めた。亥鼻のどのエリアも，基本的に一度は原形をとどめぬ再開発が行われた変遷の歴史をご理解頂けたらと思う。筆者自身，現存する建物以外何も知らなかったことを再認識させられた。今後，大学にはマスタープランに基づいたキャンパスの整備が求められており，キャンパス変遷の歴史も何らかの参考になると思う。

表紙と見返しには，馴染み深い医学部本館エントランス天井のステンドグラスをアレンジした。この撮影にあたっては，黒川登氏と岩下久夫氏に光の加減等良い条件を求めて何度も足を運んで頂いた。このステンドグラスのデザインの謂われは不明であるが，中央部分の印象的な赤褐色の部分等，大国主命が因幡の素兎の施療に用い，千葉医学専門学校の校章にも使われた蒲を思わせもする。ただ，これは全くの私見で根拠に乏しい。何かご存知の方は是非お教え頂きたい。

キャンパスの建物から樹々に目を移すと，今や「亥鼻の森」と呼ばれる緑が広がっている。本誌記事の「亥鼻へ移転 1890年（明治23年）」にもあるように，前身の第一高等中学校医学部と県立千葉病院が亥鼻に移転して来る前の明治14年の地図には，亥鼻台の大部分が「畑」と記されており，移転時の写真でも樹々はまばらである。その後，先達が営々と植樹を行い，今日の姿に育てたのであろう。今も樹々の間に，植樹の記念碑と思われる小さな石柱等が多数みられる。亥鼻の森は，自然林とはまた一味違った価値を有する歴史の森と言えよう。この森には，春から夏にかけて，黄，黒，青条等の美しい揚羽蝶が多数舞う。最近では，「獅胆鷹目」の日本への伝道者の有力候補と目されるシーボルトが長崎で採取したというナガサキアゲハも見られる。温暖化の影響であろうか。150周年を迎えるころ，さらにその先はどのような様子であろう。東日本大震災からの復旧とともに，穏やかな日々であることを祈る。また，このキャンパスからの医学，医療に対する実り多い貢献が続くことを願う。

文献，写真等の資料収集，その他この記念誌発行，ならびに新会館建設等の事業推進全般にあたっては，医学部ならびに附属病院の事務部の皆様方，ゐのはな同窓会事務局の皆様方に，言葉で言い尽くせぬほど大変お世話になりました。また，最後になりましたが，ご執筆，ご寄稿頂いた皆様方，巻末に記させて頂いた記念事業会，編集協力者の皆様方に，心から御礼申し上げます。

2012年５月31日

記念誌出版委員会を代表して

瀧　口　正　樹